加賀能登の特産・伝統野菜（3）

石川県農業情報センター
主任農業専門技術員
今　井　周　一

Ⅱ明治・大正時代

この時代も県外から人々の往来によって齎された野菜が多い。新しいものとしてトマト，キャベツなどの西洋野菜は，明治7～18年に至る間，日本政府によって外国から種子を輸入し，栽培が奨励された。これらの野菜が明治，大正まで県下に広く栽培が普及した陰には，全国屈指の歴史ある県立松任農業高校（現県立翠星高校），明治10年に金沢に設置された農事講習所ゆかりの人たちの活躍がある。また，明治35年に開設された石川県農事試験場の地道な研究活動の成果がある。

1．セリ（諸江のセリ）

来　歴

江戸時代は，田んぼに水を溜めておく田井にセリが自生もしくは栽培されていた。明治に入ってから弓取郷の上安江・下安江の水田に栽培され，その後，諸江の柿本庄左右衛門が安江より諸江の方が水質がよく，こんこんと湧き出る豊富な水量に気づきセリを栽培したのが始まりと云われている。

写真1．諸江のセリ生育風景

栽培の歴史

諸江のセリは明治初期から栽培されており，諸江自慢の特産品で，昭和に入ってからさらに生産が伸びた。昭和30～50年頃が盛んで県内生産量の100％を占めるだけでなく，県外各地へも広く販売された。諸江地区にセリが良くできたのは，付近の浅野川の伏流水により清潔なかんがい水（湧き水）がセリの栽培に適していたからである。昭和40年頃から湧き水の量が減り，深い井戸を掘って電気で水をくみ上げて栽培している。

写真2．諸江のセリ

主な産地と旬

産地と収穫期：金沢市諸江地区／
11月～3月下旬

旬：秋冬

2．タマネギ（葱頭）

来　歴

農業恐慌を乗り切るために明治21年ごろ山島村（現松任市山島）の米田喜助氏が淡路島より持ち帰った種子を同村の松田藤兵衛氏が栽培したのが始まりであるといわれている。

栽培の歴史

4たびの試作から水田裏作の作物として定着したのは，明治42，3年ごろ，金田喜太郎氏を中心とした青年達によってであると伝えられている。「ふるさと　里のいぶき」（平成5年7月）に農業

写真3．タマネギの生育風景

恐慌による不景気から抜けだすために，山島村では山島青年産業更生組合を組織し，タマネギの共同栽培と共同販売，肥料共同購入などを行っている。昭和7年におけるこの地域の作付面積は5.4ha（能美，石川，羽咋，鹿島郡が大きく，県下で41ha，石川県統計書）であると書かれている。

このように水稲単作経営の中に裏作として定着したものの，昭和12年の日中戦争，16年の太平洋戦争勃発によってタマネギ栽培の中心であった青年達が戦場にかり出されたことから完全に栽培が途絶えることになった。戦後，タマネギ栽培は復活したものの，自給野菜的性格が強い。現在，松任市山島地区では苗の生産販売が行われているが，販売用として栽培されているのは河北潟干拓地だけである。

主な産地と旬

産地と収穫期：河北潟干拓地／6月上旬～下旬

旬：初夏

3．ナス（ヘタ紫ナス）

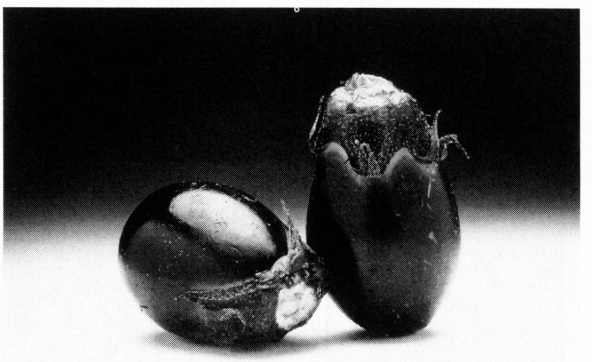
来　歴

ナスは中国より直接に，あるいは朝鮮半島を経由して日本に齎されたが，それが全国各地に土着して，それぞれの地方の環境や好みによって，独特の地方種を生み出している。特に丸ナスは，北支，朝鮮を経て北陸に伝わったとされている。ヘタ紫ナス（丸ナス）の来歴は不明であるが，明治22年頃，市内の近郊野菜産地（有松，泉地方）に栽培されていた「小木」と呼ばれる系統から見い出されたものと伝えられている。

栽培の歴史

明治22年頃から栽培され，現在も作られている。

写真4．　ヘタ紫ナス



昭和の初期に現在の産地，金城地区（野田台地），崎浦地区（小立野台地），米丸地区，三馬地区で栽培されるようになった。このヘタ紫ナスは，一名小立野ナス（小立野台地），大桑ナス（野田台地）ともいわれ，最近では丸ナスの名称で広く市民に親しまれている。

品種の特性

「ヘタ紫ナス」は，短卵形の小ナスである。その名のとおりヘタの下まで紫色になり，そのうえ色やつやがよく，日持ちがよい。皮が薄くて，果肉が柔らかく甘みがあるのが特徴である。

草型は横繁性で，分枝はやや多く多収性であるが，干ばつに弱い傾向がある。現在では，「加賀へた紫」で市販されている。

主な産地と旬

産地と収穫期：金沢市崎浦地区／
6月上旬～10月下旬

旬：初夏～初秋

石川の味（郷土料理）

皮が薄くて，果肉が柔らかく甘みがあるので宿漬（ぬか漬けのことで，7月～9月頃まで漬ける）などの漬物として，また，煮くずれしにくいので煮物用として重宝がられている。

なすびでいろどる夏のおかず

金沢の郷土料理として，なすのオランダ煮，なすの素麺かけの煮物は，蔕紫ナスがあってこそ生まれた料理である。他になすと素麺のおつゆ，つる豆となすの煮物，なすの芥子漬けなどがある。

4．トマト

来　歴

トマトは，古く（江戸時代）から唐なすびや珊瑚茄（さんごなすび）などと呼ばれ，明治の初めには蕃柿（あかなす）や蕃茄（あかなす）と呼ばれた。その後，蕃茄（とまと），昭和に入ってから蕃茄（トマトー，トマト）と呼ばれ，現在ではトマトが一般的な呼び名となっている。

日本にはいつ頃から導入されたかはわかっていないが，本格的に導入されたのは明治に入ってからだとされている。石川県では，石川県農事試験場（明治35年設立）が設立当初からトマトの品種比較試験の実施や全国屈指の歴史を持つ松任農業高校（明治9年創立、現翠星高校）の卒業生が明

治39年に七尾市で栽培したとの伝え話があることから，本県での栽培は明治後半からであろう。

栽培の歴史

大正３年の石川県統計書に蕃茄（1.9ha）の記録があることから，大正時代がトマト栽培の走りであると思われる。本格的に栽培されたのは昭和６年からである。戦後，需要の増加とともに金沢市（米丸，三馬，金城地区），石川郡（松任市，野々市町）を中心に県下に広く栽培が伸びてきた。栽培も露地栽培から施設栽培（昭和37～38年）に変わっている。施設も当初の竹幌式ビニールハウス・ファイロンハウスから現在のパイプハウス・ガラス温室に変わっている。

写真５．ハウストマトの生育風景

主な産地と旬

産地と収穫期：半促成栽培

加賀市，小松市，松任市，野々市町，河北潟干拓地，珠洲市，内浦町／５月中旬～７月下旬

雨よけ夏秋栽培

吉野谷村，河北潟干拓地／７月中旬～９月下旬

抑制栽培

小松市，松任市，金沢市，河北潟干拓地／８月下旬～11月下旬

旬：夏

５．キャベツ（甘藍，玉菜）

来　歴

「石川県園芸要鑑」（大正5年）に明治７年から18年に至る間，政府は外国からキャベツなどの西洋野菜の種苗を輸入し，各県にそれを頒布して奨励した。県内でも同11年，12年頃から試みられたが「市人の風味になれずして，需要少なき」とそのころの記録が書かれている。しかし，明治38年の日露戦争がきっかけとなって急激に栽培面積が増えた。

栽培の歴史

明治38年，短期間だったが，６千人を超すロシア人捕虜が金沢にやってきて，各所に分散収容され，食事にキャベツが大いに使われた。これがきっかけとなって，明治末から大正にかけて，金沢キャベツがロシア（ウラジオストク）に輸出されたという記録がある。当時のキャベツ栽培地である金沢市泉が丘，三馬，米丸，金城，崎浦地区が主産地であった。

その後，各地にキャベツ栽培が普及し，富来町（昭和45年～），河北潟干拓地（昭和56年～），内浦町（昭和20年～），松任市（昭和30年～）などでキャベツ産地が出来ている。

写真６．キャベツの生育風景

主な産地と旬

産地と収穫期：

春どり：松任市，金沢市，河北潟干拓地／５月～６月

初夏どり：松任市，金沢市，河北潟干拓地／６月～７月

夏秋どり：松任市，河北潟干拓地／

秋冬どり：松任市，金沢市，河北潟干拓地，内浦町／10～12月

旬：春・秋冬